

第
3
部

勉強会・講演会報告

SÉANCE D'ÉTUDE ET CONFÉRENCE

◆ 2014 年度 勉強会報告 ◆

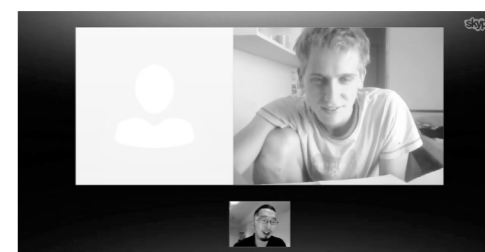
日仏学生フォーラム (FFJE) のメンバー間で構築出来る学びとはいかなるものであろうか。今年度の勉強会のプログラムを構成するにあたって、私はこの問いを見つめ直すところから始めた。FFJE は、それぞれの大学で各自の学問分野において研鑽を重ねており、多様な学問的視座を持つ集団であることを大きな特徴とする。そして、その学問的多様性は日本側メンバーとフランス側メンバーとの交わりによってより一層のものとなる。私はこうした多様性のある環境における「メンバー間の他者性」が、FFJE の学びを拓く鍵であると考えた。つまり、他者性を持った相手との交流こそが学びにおいて重要なのである。

こうした考えを基として、今年度の勉強会はこれまでのものとは様相が異なるものへと変わる事となった。変化の大きな特徴として、これまで日本側メンバーのみで行われていた勉強会をフランス側メンバーと共にを行った点が挙げられる。これは「タンデム学習」を導入した事によるものである。タンデム学習とは、外国語の学習者同士がコンビを組んで、お互いの学習言語と母語とを用いることによって、教え合い・学び合いを行う学習活動である。これまで日仏双方のメンバーが交流する機会は、二週間のプログラム以外ではほとんどなかった。日常的なタンデム学習によってこの点を解消し、年間を通してお互いの交流が持続すれば、日仏のメンバー間により深い繋がりを生み出せるのではないかと考えた。日本とフランスという遠方に住む者同士の交流活動はインターネットを介したものになる訳だが、各コンビによって活動の形態はさまざまなものとなった。Skype によるビデオ通話を行うコンビもあれば、Facebook のメッセージ機能を用いた文章のやり取り、あるいはメールによる文通を行うコンビなど、学習方法は多岐に渡った。ただ、今年度から始めた活動ということもあり、まだ手探り状態の部分が多いのが現在の実情である。フランスとの時差調整や、それぞれの大学の学習活動とどう折り合いをつけていくかを始めとして、具体的な学習方法・形態はどのようなものが適しているのかなど、実践を通していく中でより良い活動にしていくためのヒントを逐次探り、活動の仕組みの改善を図った。例えば、来日プログラムを実施する前に進んでいた前期タンデム活動に対するアンケートによるフィードバックの中から、学習方法・内容の決定をそれぞれのコンビに判断をゆだねた結果、何をどのように行えば良いのか分からなかったという意見が出たことを踏まえ、後期の活動からは明確なタスクとして各コンビの活動の成果報告を作成し、定例会議の中でその成果報告を全体にシェアするなど、その都度新しい試みを行ってきた。だが、依然として改良の余地は残っているように感じる。今年度のうちにこれらの改善点を踏まえたガイドラインやモデルケースを作成し、来年度以降のタンデム活動の基盤となれるようなものを残したいと考えている。

日本側メンバーのみで行った勉強会としては、それぞれのメンバーによる自己紹介を踏まえた各自の興味分野や専攻する学問に関する勉強会や、講演会開催に向けた知識を補強するための勉強会は例年通り継続して行った。さらにそれらに加え、フランス社会・文化への見識を深めるための「フランス時事ニュース勉強会」や「フランス文化勉強会」も実施した。フランス時事ニュース勉強会では、フランスの時事に関する話題をメンバーが調査して発表資料を作成し、その発表で提起された論点に基づいて全員でディスカッションを行うというものである。具体的なテーマとしては、例えばフランスにおける ISIL にまつわる問題を取り上げた。フランス政府のイラク戦争時の対応と今回の対応を比較するなど、事のあらまし

を概観出来る資料・発表を元にして、フランスの ISIL への空爆の是非や、フランスで ISIL の戦闘員を志願する人が増えていることについて、さらにはフランス国内のイスラム教徒たちの存在についてまで議論を行った。フランス文化勉強会では、美術分野を専攻するメンバーによってフランス絵画についての発表が行われた。美術専攻特有の知識を基にした発表により、フランスを代表する絵画に対する造詣を深める機会となった。フランスの知識を補強するこれらの勉強会が行われることにより、渡仏プログラムを控えたメンバーたちにとっては、現地における文化体験の深化はもちろん、ディスカッションの場においてもより濃密な議論が可能となるのではないだろうかと期待される。

こうして様々な新しい試みを行ってきた今年度の勉強会であるが、例えば時事ニュース勉強会や文化勉強会とタンデム学習を組み合わせることが出来るのではないかなど、依然として構想は尽きない。勉強会全体の体系化が未完成の状態のまま任期を終える事に一抹の悔いは残る。だが、後任となる勉強会担当も熱意に溢れた人物であり、彼らが行っていく勉強会の姿がどのようなものとなるのか楽しみでもある。冒頭で述べた問いに対する私の回答は、メンバー間の中で様々に起きる絶え間ないコミュニケーションと、それによって自分の考えやものの見方が常に変化するという体験の積み重ねこそが、定量化不可能でかけがえのない FFJE 特有の学びであると結論づける。今後もその学びの体験を促進する仕組みづくりに励んで欲しいというのが、私の願いである。



フランスと日本を繋いで
インターネット通話学習を行っている様子

◆ 2014 年度 講演会報告 ◆

私にとっての日仏学生フォーラム (FFJE) の二年目の活動は、講演会担当としての一年でもあった。そしてその一年は、ただひたすらに自分の力不足を感じる場面ばかりであった。

上半期、何人かの方にご講演をお願いするも、どなたもご都合が合わないまま夏季の来日プログラムを迎えてしまった。そして来日プログラムも終わった頃、ようやく御二人の方に講演を引き受けていただくことが出来た。残念ながら御一方のご講演はその後ご都合が合わず実現することはなかったが、突然のお願いにもかかわらず快く引き受けていただけたことは、ただただ感謝の一言に尽きる。

そして11月の東京大学駒場祭では、東京外国語大学の山田文比古教授からフランスの文化外交を主題とするご講演を賜った。ご講演の詳細に関しては本報告書内の別稿に譲ることとするが、山田先生にはこの場を借りて感謝の言葉を申し上げたい。

さて、文化外交という主題は今年のテーマである「文化から展望するこれからの社会・日仏関係」を考える上での一つの視点として、ディスカッションテーマのひとつでもあった。そのため、事前の勉強会はメンバーによる山田先生の著書についての発表に加え、外交班の班員による文化外交に関する文献や論文の紹介など、これまでになく充実した内容であった。彼らをはじめこの講演会の事前準備にあたって支えてくれた多くのメンバーにも、同様に感謝の意を表したい。

結果として今年の講演会は一度のみの開催となってしまったことについて、私自身の力不足が強く悔やまれる。一方で、学生のみでは不足しがちな知識に関して教えを乞うにあたっては、講師をしてくださる方のご厚意に与ることになるという事実を改めて実感した。もちろん、残念ながら今年ご都合のつかなかった方々から頂いた暖かい応援の言葉も、活動を続ける上での大きな支えになったことは言うまでもない。私は今年で卒業してしまうが、どんな場面であってもこうした多くの方々のご声援に応えるための努力と研鑽を積むことを怠ってはならない。今後も多くの方々の応援に支えられていくであろう FFJE の発展を切に願う。



11月24日、東京大学駒場祭にて東京外国語大学教授の山田文比古先生をお招きして講演会を開催した。山田先生は外務省勤務のご経験をお持ちであり、在フランス日本大使館広報文化担当公使などフランス駐在歴は10年を超える。このように長年に渡りフランスと深く関わってきた山田先生に、「影響力外交」と呼ばれるフランスの外交政策についてお話を伺った。今年度のディスカッションにおいて、外交班のメンバーが日仏の文化外交をテーマとして取り扱ったこともあり、実際に経験をお持ちの山田先生にお話を伺うことは、更に理解と関心を深める機会となった。

「フランス、またはフランス文化に関心がおありの方には、期待を裏切るといえるような話をするかもしれません。」

山田先生の思いもよらない言葉で始まった講演会は、フランスの「影響力外交」の現状、文化政策を批判的な視点から分析するものであった。

フランスが使う「影響力外交」という言葉は、文化や言葉、教育、学術交流、文化交流を通じてフランスの影響力を海外に広めることを目的とする外交を指す。フランス的な思考様式、フランスの知的的方法論を世界のより多くの人々に共有することを通じて、フランスの影響力を拡大し、外交における同国の主導権の強化を目指していくものである。

「影響力外交」の一環として、フランスは Institut Français や Alliance Française を通じて、フランス語話者およびフランス語学習者の数の増加を目指している。実際その数は今後も増加見込みであり、成功している「影響力外交」の一つに見えるが、地域別のフランス語学習者の増減を見ていくとヨーロッパや日本では伸び悩んでいる。増加しているのは経済成長が著しく出生率の高いアフリカ地域で、これは人口増による自然増が主な要因であり、一概に外交政策の成功とは結論付けることができない。また、フランス語のプレゼンスの低下は国際会議でも顕著に表れている。国連機関や国際会議で公用語として認められていても、実際に使用されているのは英語だ。

では、なぜフランスの影響力は低下しているのだろうか。アメリカと比較すると、フランスの弱点が見えてくる。フランスの Védérine 元外務大臣は、アメリカには次の八つの切り札があるという：Pentagon (軍事力)、Boeing (航空宇宙産業、先端技術)、Microsoft (IT)、Internet (SNSを通じた影響力)、Coca-Cola (人々の趣向と生活様式、特に若者)、Hollywood (文化、特に大衆文化)、CNN (メディア)、English (言葉の力)。これらの切り札が互いに作用しあい、アメリカのハイパー・パワーの源泉となるのだ。フランスにもエアバス社など、アメリカの切り札の中でも持っている札もある。しかし、メディア、趣向、文化などの大衆向け

東大駒場祭でフランスの文化外交を考える

山田文比古先生 ◎ 東京外国語大学教授

の切り札の影響力は弱い。メディアを例にとると、フランスは国際放送 TV5 を展開しているが、英語での放送も行っており、ここに英語の力に強さを認めざるをえないジレンマが感じられる。また、フランスのコカ・コーラには、日本にも進出した炭酸飲料のオレンジーナが挙げられるが、コカ・コーラに比べると知名度も劣る。一方でフランスの映画文化は、「文化は守られるべきもの」として「文化的例外」を掲げ自由競争から遠ざける文化政策の下、手厚い政策的な保護を長年受け続けてきた結果、アメリカのハリウッド映画に比べて競争力が低い。しかし近年アメリカの主張する「競争すべき文化」に押され、その意義が問い直されつつある。

また、フランスの文化に対する考え方、文化政策の展開の仕方は、日本と比較した際にもその特徴が表れている。山田先生が広報文化担当公使として携わられた日仏修好 150 周年記念事業を例に挙げると、あらゆる団体・企業による事業を記念事業として認定した日本と違い、フランスは非常に選別的に事業を認定し、高尚で洗練された文化であることを重視した。フランスの量より質を問う戦略は、一つのブランディング方法ではあるが、大衆向けの発信という点では劣ると指摘できる。

フランス語学習の現状、アメリカ、日本との対比から、フランスは「守りの文化外交」だったという。日本は、非英語圏という点でフランスと共通点を持つ。フランスの文化外交を参考にしつつ、それを上回る「攻めの文化外交」をしていくべきだとして日本の外交への示唆を頂き、フランスへの批判的な、だが同国への親しみと愛情の感じられた先生の講演会は締めくくられた。

今回の講演で、フランス文化の見方が少し変化した。フランスにおける文化一つ一つは素晴らしいものであるが、それにどのような力を持たせて外交にどう生かすかは、今後も時代や人々に合わせて考え続けていかなければならないのだと感じた。今日の日本においても、幼少期からの外国語教育や企業の社内英語公用語化、衣食住の多国籍化など海外の文化を積極的に取り入れる場面が見受けられるが、日本文化へのこだわりを持ち主張するところは主張していくべきだ。それは、海外文化に興味や憧れを抱く私たち学生も意識しなければならないと思った。

